



シクラメンの成長をチェックする竹中伸枝さん



真剣な表情で作業に取り組む研修生

たくさんの手を掛け
育てられるシクラメン



出荷用としてきれいに並べられたシクラメン



一つ一つ取り上げながら、枯れた葉を摘む



ガラス温室が並ぶ道を抜け、シクラメンを出荷用トラックへ

作りたいのは、長く愛されるもの。

農免道路を中川原方面に向かうと、道路を一本入ったところに広がる畑の中、ガラスの温室が見える。11月、温室内では赤、白、ピンクと、色とりどりのシクラメンが、花のじゅうたんを織りなしている。

竹中園芸の2代目、竹中伸枝さん(33)。およそ40品種、7万鉢のシクラメンを栽培している。シクラメンは、今まさに出荷最盛期。パート5人、フリーピンからの研修生2人、そして両親と一緒にシクラメンの鉢1つ1つを取り上げながら、枯れた葉を摘み、トレイに載せていく。10月に始まったこの出荷作業は、12月下旬まで続く予定だ。

シクラメンは、昨年12月から種をまき、ほぼ1年かけて、丹精込めて育ててきた。水や肥料の量、温度管理の仕方、花は大きさや色を微妙に変える。だからシクラメンの『顔』には農家の個性が表れる。伸枝さんのつくるシクラメンは優しい色の花を咲かせる。

伸枝さんは「松前の湧水を使っているからきれいな花が咲くのかも」と笑う。

温暖な気候の松前町。それに対して、本来、シクラメンに適するのは涼しい気候。暑いところで育ったシクラメンは暑さに強い。松前のシクラメンは、名古屋や大阪、四国全般でも高

い評価を受けている。

長く楽しめることも伸枝さんのシクラメンの特徴。1つ手に取ると、咲いている花の根元には、次の出番を待つほみが競い合うように顔を出していた。

「たくさん花を咲かせて、長く愛されるものを作りたい。普通後継者は上の意見を聞くことが多いけど、うちの両親は私の意見を尊重してくれる。パートさんやお客さんにも意見を聞かせてもらって、常に新しいものも考えるようにしてる」という。

「シクラメンの魅力は、冬の寒い時期に部屋をばつと明るくするところ。ここでつくったシクラメンが一つ一つ誰かの家に行くと思うと幸せ」と微笑む。間もなく、次の年に向けて種まきが始まる。伸枝さんは、「来年、再来年、これからもずっと、誰かの笑顔のためにシクラメンを育てていきたい」と話していた。



写真左から、竹中圓さん、伸枝さん、秀一さん。松前に移転して30周年